

二人のわらべ



No. 556
令和7年12月15日
天童市教育委員会
学校教育課



食で育む未来の力

天童市給食センター
所長 森谷英明

はじめに

日々、学校給食に関わる中で、「食」の大切さを改めて実感しています。私たちが毎日口にする食事は、体を作るだけでなく心にも影響を与え、健康で豊かな人生を送るための土台であると、年齢を重ねるほど感じます。先日、教育委員会による学校訪問で各校を訪れた際、子どもたちが元気に学び、授業の中で活気に満ちた姿を見ました。そうした姿を見ると、学校給食が子どもたちの学校生活を支え、元気をもたらす重要な役割を果たしていると思います。

食育の大切さについて

「人生100年時代」と言われる現代、心身ともに自立して過ごせる「健康寿命」を延ばすことは、私たちの大きなテーマとなっています。その基礎となるのが、栄養バランスの取れた日々の食事です。未来を担う子どもたちには、自分の体を支える食の大切さを、できるだけ早い段階で学んでほしいと思います。学校給食は、その学びの場として非常に重要な役割を担っています。単に食事を提供するだけでなく、安全で栄養価の高い給食を通して、子どもたちが健康的な食習慣を身につけ、食を通じて感謝や協力の気持ちを育むきっかけとなることが、学校給食センターの大切な使命だと考えています。

天童の恵みについて

この食育を一層豊かなものにしているのが、天童の食の恵みです。天童市は、豊かな自然や昼夜の寒暖差といった気象条件に恵まれ、美味しい農産物が育ちます。全国に誇るさくらんぼ「やまがた紅王」をはじめ、「つや姫」や「雪若丸」といったお米、ラ・フランス、桃、りんごなどの果実、旬の野菜類など、多彩な作物が生産されています。旬を迎えた地元の食材のおいし

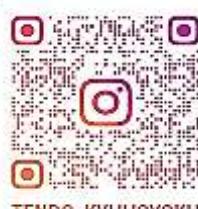
さは、栄養価が高いだけでなく、子どもたちの心に感動を与え、食べた記憶を通じて豊かな思い出を刻む力を持っています。

学校給食で味わった食の記憶は、大人になっても心に残り、人生を支える糧となることもあるでしょう。例えば、進学や就職でふるさとを離れ、さくらんぼやラ・フランスを目にして故郷を思い出すことがあるかもしれません。天童産の食材を使用した芋煮の味が懐かしくなるという経験も、ふるさとの魅力を感じるきっかけの一つかになるのではないでしょうか。

学校給食を通じて地域の食材と触れ合う体験は、子どもたちにふるさとへの愛着を育み、感謝の気持ちを深める貴重な機会となります。このような「食の記憶」は、子どもたちの心を豊かに彩り、生涯を支える力となるでしょう。

おわりに

学校給食センターの活動は、子どもたちの健やかな成長はもちろん、地元生産者や地域社会にとっても価値ある「三方良し」を目指す取り組みでありたいと考えています。現在、学校給食センターでは、毎日の献立の写真をフェイスブックやインスタグラムで発信し、ご家庭の皆さんにも関心を持っていただけるよう機会を広げています。ぜひ、お子さんとともに、日々の食事やふるさとの食材について楽しく語り合うきっかけとしてご活用いただければ幸いです。それが、未来の天童、そして日本の食文化を豊かにしていくことにつながると思います。



TENDO_KYUUSYOKU

すこやかスクール支援員より

支援員として心がけていること

天童市立干布小学校 すこやかスクール支援員 佐藤 香

私が支援員として心がけていることは、いつも朗らかな機嫌のいい大人でいることです。支援員として働き始めたころは、ただ一生懸命なだけで、対応がうまくいかない時にはすぐに疲弊してしまうような状況でした。経験を重ねるにつれ、支援員は子どもの感情に合わせて自分の感情をコントロールする「感情労働」が必要だと実感するようになりました。「○○くんが順番を守らない」「こんなのやらない」「うるせえ！だまれ」「せんせい、だっこして」等、子どもたちの発する言葉は様々です。言葉にならない思いや感情、表情等を受け止めるには、いかなる場合も自分自身が平穏な心でいることが必要だと感じています。

私たちは日々、子どもたちの様々な思いや感情が表出される中に身を置いています。その中で、一人一人の子どもに対して平等かつ適正に対応することが求められます。丁寧に子どもの話を聞き、気持ちを受け入れ、信じ、待つには、自分の心に余裕がないと難しいものです。私は、いつでも子どもたちと笑顔で向き合うために、自分の心を整えることを大切にしています。

インクルーシブ支援員を通して

天童市立成生小学校 インクルーシブ支援員 齋藤 稔

インクルーシブ教育は、障がいのある子どもも障がいのない子どもも同じ教室で共に学ぶことを目指す考え方で、それによってお互いの理解が深まったり、多様性を自然に受け入れられたりする力が育まれていくものと思われます。

特別支援学級の子どもたちを通常学級で支援する際に大切にしていることは、一人一人のリズムやペース、障がいの状態、特性を丁寧に理解することから始まり、わずかな気持ちの変化を見逃さず柔軟に対応することです。また、日常生活の中でも、本人が興味をもっていることにかかりわり、一緒に遊ぶことを通して、よりよい信頼関係を築くことに努めています。

障がいのある子どもが通常学級で学習することには少しハードルがありますが、ゆっくりと時間をかけてその子が自信をもてるようなサポートを大事にし、これからも子どもたちが自主的に自分の力を発揮できるよう支援していきます。

別室学習（COCOLO）支援員として

天童市立天童南部小学校 COCOLO支援員 樋口 法子

文部科学省が令和5年に発表したCOCOLOプランに基づき、令和6年度より天童市にCOCOLO支援員が配置されました。

常に念頭に置いていることは、ここ校内教育支援センター（別室）は、子どもたちが混乱した状態でなんとか辿り着いた“迷いの河の中洲”のような場所だということです。陸に上がって息を整え、自分の状況を把握したり、岸辺の様子を気にしたり、自分がどうしたいのか言えるようになるまでには長い時間がかかります。力を蓄えて、その子自身が目指す岸に向かって泳ぎ出せるようになるまで、根気強く寄り添います。

行き着く先は、通常の学級、特別支援学級、医療、教育支援センター、フリースクール、ホームスクーリング等、いずれになるかは分かりません。しかし、子ども自身が「現状ではないどこか」を求める限り、待ち、伴走し、必要な装備を渡し、あらゆることを一緒に行いつつ、「今日来てよかったです」と思える日を一日でも多く積むことを目標に日々を過ごしています。